真庭市埋蔵文化財調査報告７

家の上古墳発掘調査報告

2016
真庭市教育委員会

序

真庭市蒜山地域には、旧石器時代の遺跡が数多く見つかっており、歴史の古さは岡山県下でも際立っています。また、国の史跡に指定されている四ツ塚古墳群など著名な古墳を始め、さまざまな時代の遺跡が数多く残されています。

家の上古墳は、昭和44年に宅地造成中に発見された箱式石棺を主体部にもつ古墳ですが、諸般の理由により報告書の刊行が遅れ、このたびようやく刊行の運びとなりました。

家の上古墳は、発掘調査時には墳丘は残存せず、副葬品も認められなかったため古墳の規模や築造時期は不明ですが、副室を有する箱式石棺を埋葬施設とする、真庭市内でも類例のない埋葬方法であることが分かりました。これにより、蒜山地域の古墳時代の埋葬のあり方に新たな資料が加わり、今後の蒜山地域の墓制研究が進展することが期待されます。

最後になりましたが、調査及び報告書の刊行作成にあたり、関係者並びに地元地域の皆様から多大なご支援とご協力を賜りました。末筆ながら、厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

真庭市教育委員会
教育長　沼　信之

例　言

1　本書は、1969（昭和44）年に個人の宅地造成中に発見された箱式石棺の調査報告書である。

2　発見時の遺跡所在地は、真庭郡八束村下福田字家の上466番地であったが、平成の合併で、現在は真庭市蒜山下福田字家の上466番地と行政区が変更された。

3　遺跡の名称については「蒜山中学校前の石棺」と通称してきたが、この度の報告書を刊行するにあたり、真庭市教育委員会と協議し、小字名をとって「家の上古墳」と命名した。ちなみに、岡山県教育委員会が2003年に発行した『改訂岡山県遺跡地図〈第2分冊真庭地区〉』では、八束村番号25で無名称となっている。

4　発掘調査は、1969（昭和44）年11月11日と12日に、当時、岡山県教育委員会社会教育課職員であった河本清が当たった。

5　本書の執筆・編集は、河本が行った。また、石棺の図面トレースは、瀬戸内市教育委員会社会教育課遺跡遺物・町史資料整理員関　幸代氏の手をわずらわした。記してお礼を申し上げる。

6　古墳から出土した人骨については、1992（平成4）年に池田次郎氏にその鑑定をお願いした。その玉稿は、付載として後段に掲載した。人骨は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

7　本書を刊行するにあたり真庭市教育委員会ならびに同教育長には格別のご配慮をいただいた。また、同生涯学習課長池上　博氏、同参事谷岡孝久氏には雑事を含めて全般的にご支援いただいた。記して感謝申し上げる。

8　第1章第2図の地図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「湯本」を複製し、加筆したものである。

9　箱式石棺は、調査後に旧八束村役場並びに蒜山教育事務組合教育委員会によって、蒜山中学校内に移築保存し、説明看板を立て、公開されていたようであったが、現在は解体されて蒜山郷土博物館の敷地内に移されている。

目　　次

序
例言
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の概要 …… 5
　第１節　調査に至る経緯と事後の措置 …… 5
　第２節　箱式石棺の調査 …… 6
第３章　まとめ …… 8
付載　岡山県蒜山中学校門前の箱式石棺出土の古墳時代人骨 …… 13
図版
報告書抄録

図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図 …… 2
第３図　箱式石棺平面図・断面図（1/40） …… 7

表目次

表１　頭蓋計測値の比較（女性） …… 15
付表　１号頭蓋計測値（表１の項目を除く） …… 16

図版目次

図版１　１　家の上古墳位置遠景（南東から：2015年10月撮影）
　　２　家の上古墳所在地（校門の柱の左・東から：2015年10月撮影）
図版２　１　箱式石棺蓋石検出（西南から）
　　２　箱式石棺蓋石検出（東南から）
図版３　１　石棺蓋石の接合状況（南から）
　　２　石棺副室部（東端小口石と天井石消失・東南から）
図版４　１　石棺石蓋除去後（東から）
　　２　石棺、頭蓋骨（1号人骨）と石枕検出状況（東から）
図版５　１　石棺・人骨検出状況（主室と副室[手前]・東から）
　　２　石棺・人骨検出状況（西から）
図版６　１　石棺・石枕の検出状況（東から）
　　２　１号人骨頭蓋骨（「岡山県教育委員会所蔵」2014年10月撮影）

第１章　地理的・歴史的環境

岡山県真庭市の旧八束村地域は、岡山県の北端に位置している。中国山地の山中にあるこの地は、西の旧川上村地域と一体となって蒜山盆地を形成している。蒜山盆地は、北に蒜山三座と通称される上蒜山・中蒜山・下蒜山などの標高1,100m級の脊梁山地によって、鳥取県との境域をなしている。蒜山三座の南麓は、海抜高度500m前後の高原状の地形が緩やかな傾斜をなして広がり、その先端は、旭川が西から東へ貫流する。旭川を挟んだ南側は、標高約708mの高張山等に代表される山地によって盆地は画されている。その広がりは東西約20km、南北約8kmである。

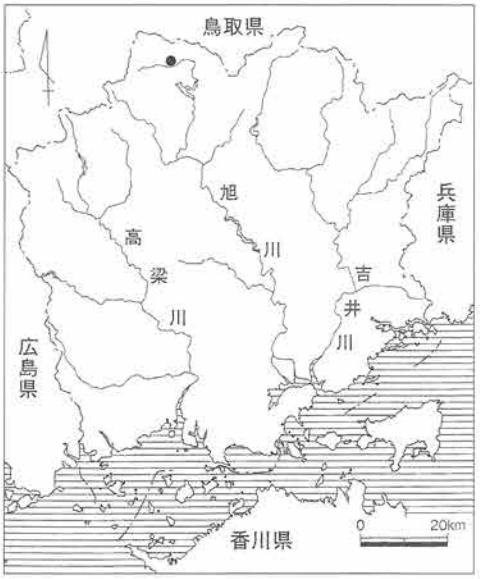
旭川は、かつては東から西に流れ、鳥取県西部を北流する日野川域から日本海にそそいでいたと言われている。その後、大山の噴火によって流路はふさがれ、古蒜山湖が形成された。湖には植物プランクトンの一種である珪藻が繁殖し、その遺骸は珪藻土となって湖底に厚く堆積した。

湖水となった旭川は、その後の浸食作用等によって山陽側に流路を拓き、現在の蒜山盆地を形成した（註１）。旭川は、また、旧川上村と旧八束村の流域に、わずかばかりの沖積平野を形成するが、盆地の大半は高地地形で、旭川右岸側には河岸段丘状の低位部を形成して盆地の一部をなしている。

気温は、平成10年度の蒜山上長田で年平均12.5度である。ちなみに、津山市同14.9度、岡山市同17.3度に比較すれば、かなり冷涼な気候であることが知られる。特に、冬季の気温は低く、平成11年2月の平均気温は蒜山上長田で－0.4度である。同月の津山市は2.2度、岡山市は5.3度であり、県南のみならず美作の津山地域に比べても低い気温となっている。

降水量は、平成10年の蒜山上長田では年平均2,328mmで、県南の岡山市1,261mmに比べればかなり多い。特に冬季の積雪は多く、美作地域にあっても長い間、交通や流通の障害となってきていた。

このように、低温多雨の山地型気候といわれる蒜山盆地であるが、旧石器時代からの数多くの遺跡が残され、人々の長い生活の歴史をたどることができる。1980年以来鎌木義昌氏、小林博昭氏らによる旧八束村戸谷遺跡（註２）などによる発掘調査によって、25,000～22,000年前に噴出下降した姶良丹沢火山灰層を鍵層とした層位的な発掘調査の成果や、白石純氏の精力的な分布調査により、この地域の旧石器時代の研究は大きく進展した。その後の開発に伴う調査では、旧川上村中山西遺跡（註３）、旧川上村城山東遺跡（註４）、旧八束村上野遺跡（註５）旧八束村水別遺跡（註６）、旧八束村東遺跡Ｉ（註７）などで精査され、ナイフ形石器から細石器までを使用した蒜山地域の後期旧石器時代人の生産活動が明らかにされつつある。



第１図　遺跡位置図

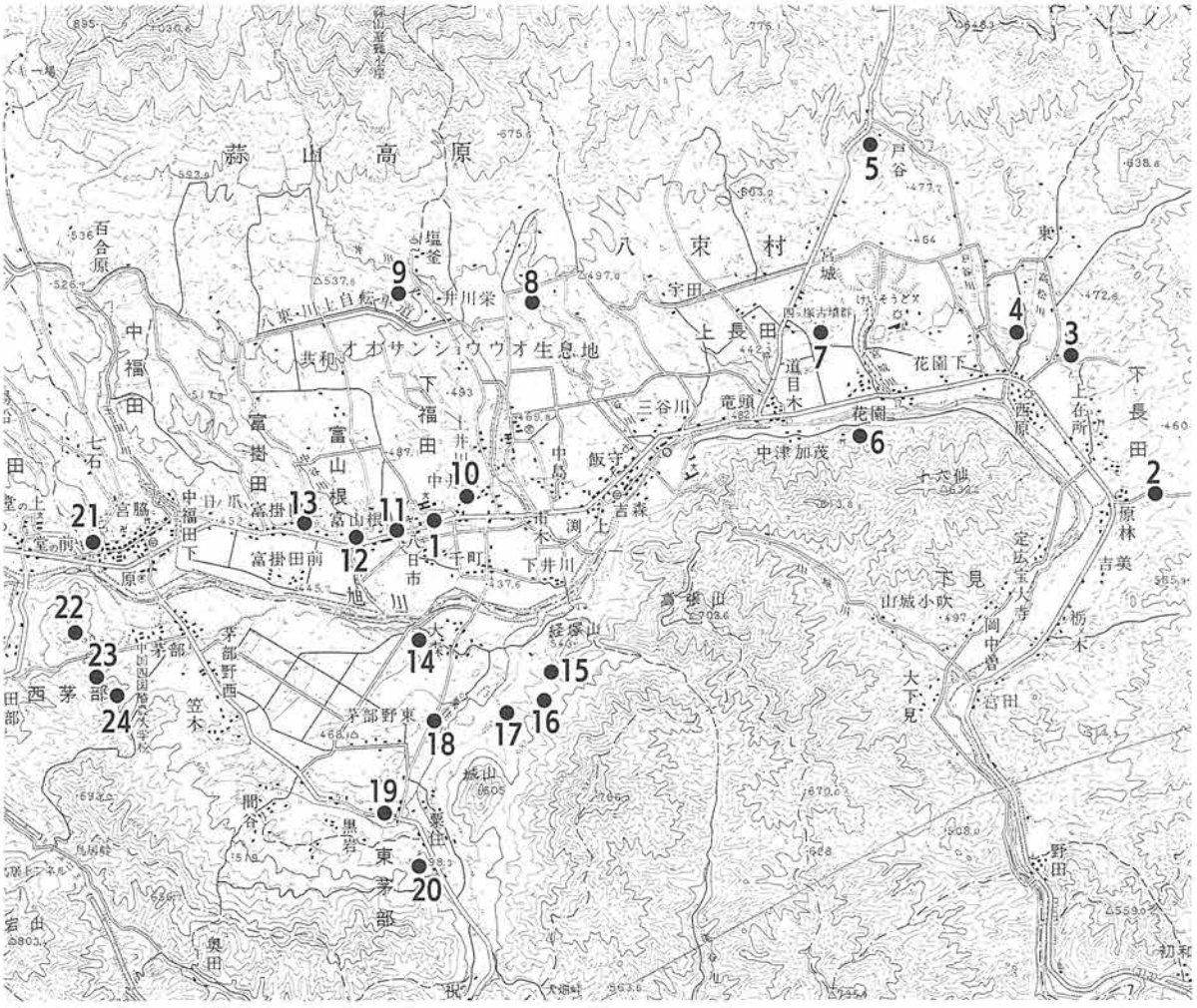
縄文時代の遺跡については、1954年に刊行した『蒜山原―その考古学的調査―』（註８）では、旧八束村中津加茂遺跡など８か所で土器片や石器を採集するにすぎなかったが、白石氏などの分布調査や米子自動車道建設に伴う調査などで多くの遺跡が調査され、また、確認されている。盆地南部の丘陵部を開通した米子自動車道では、中山西遺跡では縄文早期の竪穴住居跡と落とし穴が、城山東遺跡、下郷原田代遺跡では落とし穴が調査された。

また、盆地東北部の上野遺跡でも２基の落とし穴が検

出されている。これら落とし穴は、狩猟に伴う罠として計画的に掘り込まれた遺構であるとされている（註９）。

弥生時代の遺跡は、米子自動車道建設に伴う調査で初めてその具体的状況が明らかとなった。旧川上村城山東遺跡（後期の竪穴住居跡２軒）（註10）、旧川上村下郷原和田遺跡（後期の竪穴住居跡複数あり）（註11）、同下郷原田代遺跡（後期の竪穴住居跡２軒、分銅形土製品他）（註12）などである。土器からみられるこれらの特徴は、後期になると山陰地域、特に倉吉地域の影響を受けた器形や施文が顕著となる。このことは、弥生時代前期・中期には人の動きが希薄であった蒜山地域は、後期から古墳時代にかけては丘陵部に居をかまえて集落を形成し、山陽側だけでなく日本海側との交流を強めた人々の活動が窺える。

古墳時代では、研究史的に見れば1916年に乱掘された旧八束村所在の四ツ塚１号墳（註13）は、羨道開口部を北に向けた片袖式横穴石室であるが、出土遺物や石室構造の調査から古墳時代後期の古い時期に位置づけられた。四ツ塚13号墳（註14）は、墳丘径19mに長さ4.3mの低小な造り出しと



1	**家の上古墳**	2	水別古墳・水別遺跡	3	上野古墳群・上野遺跡
4	東遺跡	5	戸谷１地点	6	中津加茂遺跡
7	四ツ塚古墳群	8	上長田狐塚古墳群	9	下福田狐塚古墳群
10	御崎塚古墳群	11	八日市古墳	12	富山根古墳群
13	寺畝古墳群	14	大森塚古墳	15	釜穴古墳
16	大森シスト１・２号	17	青葉台古墳群	18	茅部野古墳群
19	黒岩古墳群	20	粟住古墳群	21	頓崎古墳群
22	石路山古墳群	23	バンノ木古墳群	24	平林古墳群

第２図　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）

周溝をもつ古墳の発掘調査で、蒜山地域では初めての学術調査である。埋葬施設は２基の箱形の木棺直葬で、多くの出土遺物からその造営は1号墳よりも古い様相を示すものとした。頓崎古墳群は盆地中央部の西よりに所在し、行政区画では旧川上村と旧八束村にまたがる位置に所在する十数基からなる古墳群である。1985年に岡山理科大学はそのうちの頓崎９号墳（註15）を発掘調査した。その結果、古墳は円墳で墳丘径10ｍばかりで周溝をもつ。埋葬施設は木棺直葬で、時期は出土須恵器から６世紀中葉の前半よりとされた。その後は、諸開発に伴う古墳の発掘調査である。旧八束村所在の上野１号墳・同２号墳（註16）は、墳丘は完全に削平されていたが、周溝の一部の確認から１号墳は径11ｍ前後の円墳を、２号墳は一辺10ｍあまりの方墳を検出した。時期は２号墳周溝出土土器から５世紀後半と推定している。水別古墳群（註17）は、旧八束村下長田に所在した３基からなる横穴式石室墳である。１号墳は、径７ｍの円墳である。石室は、両袖式の横穴式石室で、玄室が方形平面を企画することや、石室構築構造の特徴から伯耆地域からの影響を指摘している。６世紀後葉から７世紀前半にかけて、築造・追葬されたとする。２号墳は、径７ｍの円墳であるが、墳丘の一部は１号墳の墳丘を切って築造している。石室は両袖式の横穴式石室であるが、玄室は１号墳とは違い長方形の平面企画である。築造は６世紀後半である。３号墳は、墳丘並びに石室も大きく破壊されていたが、周溝の検出から一辺約６～７ｍの方墳を推定した。また、北にある２号墳の墳丘を切って３号墳の周溝を設けていることから、古墳群中もっとも新しい古墳であることも知られた。石室は残存石材から推測して、１号墳に類似した方形平面をしていたと考えられている。時期は７世紀中前後の築造とされる。

古墳時代の集落遺跡は、米子自動車道建設に伴う調査で方形の竪穴住居跡が検出された。城山東遺跡では、古墳時代前期のものが２軒、下郷原和田遺跡では、古墳時代前半から６世紀中葉にかけての時期のものが複数軒確認されている。このような発掘調査による成果とともに、総合的な遺跡分布調査により古墳の確認数も増加し、現在では、旧川上村と旧八束村を合わせた蒜山盆地には180基を超える古墳が確認されている（註18）。こうした古墳群の総合的な分析は未だに進んでいないが、四ツ塚13号墳の調査で明らかにされた木棺直葬による祭式から、四ツ塚１号墳に横穴式石室が導入され進展がするなかで、水別古墳群のように山陰地域との交流関係を具体的に示唆する石室も出現している。こうした状況は、美作の辺境の地ともいえる蒜山原地域を生きた人々は、他の地域と独自の交流を深めるなかで、地域的個性を残しながら発展していった人々の証として評価される。

奈良時代に至ると美作は備前国の北にあたる６郡を割いて分国し、美作国として建国される。そして、この地域は、美作国大庭郡と真島郡に郡分けされ律令体制に組み込まれることとなる。

註

1） 光野千春・沼野忠之・高橋達郎1982『岡山県の地学』 山陽新聞社
2） 鎌木義昌・小林博昭1986「戸谷遺跡」『岡山県史』考古資料 岡山県
3） 下澤公明1995「蒜山地域の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会
4） 註３）に同じ
5） 平井 勝1995「下長田上野古墳群・上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』103 岡山県教育委員会
6） 金田善敬1998「水別古墳・水別遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』131 岡山県教育委員会
7） 新谷俊典2003「東遺跡Ⅰ」『蒜山文化財調査報告１』 蒜山教育事務組合教育委員会
8） 近藤義郎1954『蒜山原―その考古学的調査―』 岡山県
9） 稲田孝司1993「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学―坪井清足さんの古希を祝う会編―』 天山舎
10） 註３）に同じ

11）註３）に同じ
12）註３）に同じ
13）註８）並びに近藤義郎1992『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』八束村
14）註13）に同じ
15）鎌木義昌・亀田修一1986「頓崎９号墳の発掘調査」『蒜山研究所研究報告』第12号　岡山理科大学
16）註５）に同じ
17）註６）に同じ
18）岡山県教育委員会2003『改訂岡山県遺跡地図』〈第２分冊真庭地区〉により古墳基数を確認する。

参考文献

山陽新聞1999　『山陽年鑑』
山陽新聞2000　『山陽年鑑』

第２章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯と事後の措置

箱式石棺は、1969（昭和44）年11月に個人による宅地造成中に発見され、当時の蒜山教育事務組合教育委員会から岡山県教育委員会社会教育課文化財係に連絡を受けた。そこで緊急対応として、同11月11・12日に河本が現地に赴き、実測図と写真をとり現地調査を終えた。遺跡発見届は以下のとおりである。その後、石棺を中学校の校地内に移築して公開展示するとの話があり、ついては展示用看板の説明文の依頼があった。今、その時の原稿の下書きがあるので、遺跡発見届と合わせて掲載する。

遺跡発見届

蒜教教185号
昭和44年11月13日

岡山県教育庁　文化財係　殿

蒜山教育事務組合教育委員会
教育長　野口　辰巳　印

埋蔵文化財遺跡の発見並びに処置について別紙のとおり報告いたしますので、よろしくお願いいたします。

埋蔵文化財遺跡発見届

文化庁長官　今　日出海　殿

住所　岡山県真庭郡八束村下福田307の2
土地所有者　徳山　重行　印

下記のとおり遺跡が発見されましたので文化財保護法第84条の第１項に基づき報告いたします。

記

1、遺跡の種類　古墳時代の箱式石棺１基
2、遺跡の所在地　八束村下福田字家の上446の１
3、遺跡の発見年月日　昭和44年11月10日
4、遺跡を発見するに至った事情　宅地を拡張するためにブルドーザーにて削取り中箱式石棺の一部を露呈した。
5、遺跡の現状　ブルドーザーによる工事を中止させ県教委に連絡する。
6、遺跡の現状を変更する必要のあるときはその時期及び理由　家屋の拡張をはかるための工事であるため早急に工事にかかりたい。

7、出土品　人骨３体
8、遺跡の保存のためにとった処置　県教委の指導のもとに記録保存の処置をとった。

移築展示用看板の原稿

箱式石棺（古墳時代）

この石棺は、昭和44年11月蒜山中学校門前で宅地造成中に発見されたものである。このように、板状の石材を組み合わせてつくった棺を箱式石棺という。古墳時代に特定の死者を埋葬したものにもいろいろな種類がある。たとえば、この蒜山原においても、四ツ塚13号墳（木棺直葬）、四ツ塚１号墳（横穴式石室）等と違いがある。これは、古墳がその時代の思想を反映しているからである。

この箱式石棺は主室と副室にわかれ、両室とも死体が１体ずつ埋葬されていたのみで、他に何もみられなかった。副室が主室に比べて非常に小さいのは、始め主室に埋葬されていた死体（骨）が追葬のおり副室によせ集められたものと考えられる。

このような箱式石棺は、岡山県内でもかなり発見されているが、一般に人骨のみで副葬品のないものが多い。時代は他の例からみて、古墳時代中期後半（約1500年前）のものと考えられる。

第２節　箱式石棺の調査

箱式石棺は、標高1,122ｍの下蒜山の南麓にあたり、山裾が緩やかに南下する高原状地形の最先端の斜面に立地する。蒜山盆地の中心部を東西に抜ける国道482号線の低位部からみれば、道路が大字下福田に係るすぐ北側斜面の人家裏に所在し、道路との比高は10数ｍ程度である。調査時には東西に主軸をもつ石棺の東端の一部は、工事によって蓋石や小口石とそれを挟む南東端側石が消失していた。また、墳丘の盛り土の有無については不明である。

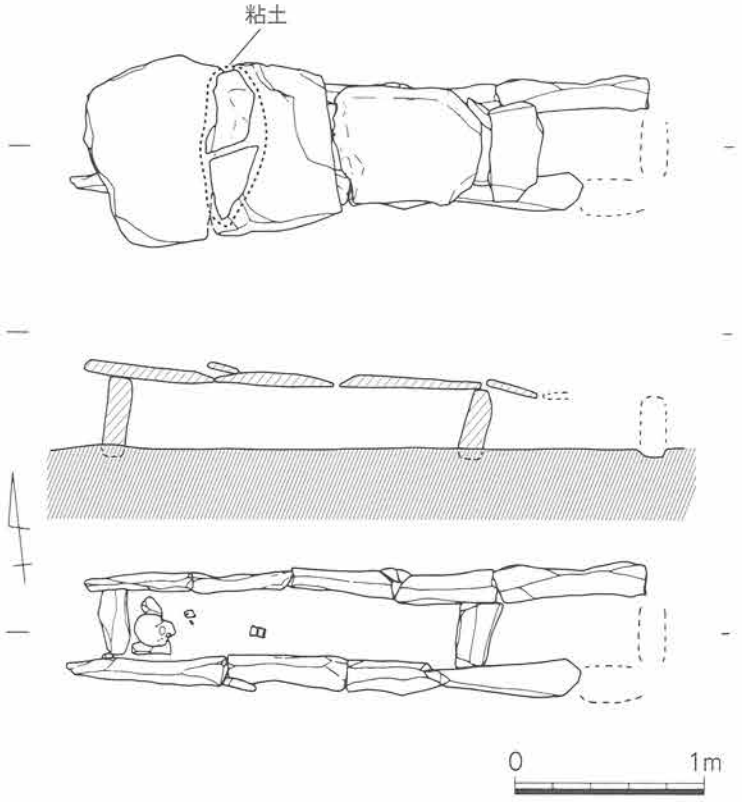
箱式石棺

石棺は、長軸を東西に向けて築造していた。すでに覆土は取り除かれていて蓋石４枚を残していた。蓋石はいずれも平石で、最大のものは西端の遺体頭部を覆う蓋石で、その大きさは平面約100㎝×約65㎝、厚さ約10㎝ばかりのものである。他の３石のうち現存する東端の石を除く２石は、西端のものよりやや小さいといった程度の大きさである。また、蓋石西端のものと２枚目の蓋石との接合部は粘土塊で目張りし、その上に長辺約40㎝ばかりの平石をのせ、接合面一帯をていねいな仕種で固めていた。このため、棺内の遺体の内、頭蓋骨部は残存状態が良かったものと思われる。

いわゆる組み合わせ式箱式石棺の身本体は、北側の５枚の側石からなり、南側は現存する４枚の側石に加えて、先述したように東端は工事により１石欠損したと想定される。北側の側石長298㎝、南側の現状での側石長273㎝である。棺内は現存する２石の小口石・仕切石と消失と推定される東端部位の小口石で仕切り、頭蓋骨遺体を残す主室と発見時には集骨された人骨があったとされる副室からなっている。主室の内法は、長さ175㎝、幅は頭部側43㎝、中央付近46㎝、足部側39㎝である。深さは頭部側38㎝、足部側30㎝である。主室と副室を画する仕切り石は、高さ約33㎝＋α、厚さ７～12㎝の平石を立てていた。現状では、副室側にやや開き気味に傾斜して立っている。副室は東端小口石と南側の東端側石１枚と蓋石１枚分を欠損している。その内法は幅35～40㎝、高さ約30㎝、長さは東端の小口石の抜き取り痕跡からの推定で約80㎝である。石棺構築に伴う墓壙の掘り方は検出していない。

石棺主室内は、西側にある頭部から中央付近にかけて、上からの流土が少し堆積していた。堆積土は、頭部南側が最大で、ここでは枕石を完全に埋めて、頭蓋骨の右側頭部を少し埋める状態であった。反対の北側の流土は少なく、枕石を覆うものではない状態であった。石棺内床面は、地山面とみられたそのものを平たく整えたものである。頭蓋骨がのせられていた枕石は、亜角礫の石２個を一対として置かれていた。棺内部の調査では、人骨遺体のほか一片の遺物も出土していない。人骨自体も頭蓋骨の遺存状態は良く見られたが、その他の遺体の遺存は良くない。枕石の東近くに歯を含む若干の骨と、さらに西の部位で脊椎骨２片を検出したのみである。調査時の状況では、枕石にのる頭蓋骨人骨１体の伸展埋葬を想定させるものであった。人骨の鑑定結果については、池田次郎氏からいただいた玉稿を付載として掲載した。それによると、主室の人骨は１号人骨とされ、熟年女性である。事後の観察では、頭蓋骨前面の両眼窩あたりに赤色顔料が見られるようだ（註１）。

副室は、調査時には攪乱されていて前述したように、南側の側石１石と東端の小口石は抜かれていた。加えて、主室から続く蓋石の東端石１枚想定分が欠損していた。石棺内部についても、埋葬されていたとされる人骨もすでに取り上げられ、発見時の記録を残すものはない。池田次郎氏の鑑定では、２体分の頭蓋骨片とその他の骨が埋葬（改葬か）されていたようである。鑑定では、２号頭蓋骨片とされるものは、壮年後半の女性で、赤色顔料が付着している。３号頭蓋骨とされるものは、成人骨で性別は不明とされている。



第３図　箱式石棺平面図・断面図（1/40）

第３章　まとめ

以上述べてきたように、家の上古墳は、主室と副室を有する組み合わせ式の箱式石棺である。墳丘を伴うかどうかについては不明である。ただ、調査時の写真をみると、石棺上面近くに樹木の細根がかなりみられる状況や、石棺検出下部の地山面とした地面は、通常の古墳の墳丘盛り土とは違っていたと記憶されるので、このあたり一帯に広がるクロボクではないが、石棺築造時の地山を整形して箱式石棺を構築し、埋葬祭式を終了したのち若干の盛り土をしたかも知れないが、その盛り土も高く積み上げて墳丘をなしていたとは想定できない。したがって、箱式石棺は、通常の古墳のように盛り土を有する墳丘内に墓壙を掘って構築したものとは想定されない。

古墳の時期については、石棺からは人骨遺体以外遺物は発見されていないので即断できない。先行研究を参考にすれば、その手掛かりは頭蓋骨をのせた２個の亜角礫の石を１対とした石枕である。豊島直博氏は（註２）、岡山県北部の弥生時代から古墳時代の墳墓で石枕・土師器転用枕・須恵器転用枕などの遺体埋葬用の枕を用いた葬送儀礼の展開を分析して、弥生時代後期前半に出現した石枕は、古墳時代中期に盛行し、下限についてはTK47形式の須恵器を伴う津山市日上畝山35号墳の南埋葬主体の木棺直葬の例から中期末とした。

美作地域の弥生時代後期の墳墓で、石枕を有するものは多数の調査事例がある。それらの大部分は木棺墓が主体で、その痕跡は、木棺小口をH状に組んだ構造の小口溝を両端に残すものである。そして、その一方をないし二方の小口沿いに、枕石を通常２個一対として添え置いている。家の上古墳は石枕を有する伝統的祭式であるが、美作地域に多い木棺でなく箱式石棺であることからみても、弥生後期までは遡らないと考えられる。ことに、副室を有する箱式石棺は、美作地域での事例は知らない。

岡山県下では、笠岡市所在の七つ塚古墳がある（註３）。七つ塚1号古墳は、長福寺裏山古墳群に属する支群の１基で、径10m、高さ１mの円墳である。墳丘の中央に主軸を東西に置く組み合わせ式箱式石棺を設けている。主室は東側にとり、副室はその西側に平石１枚を立てて設けている。主室は、長さ2.2m、幅0.5m、高さ0.45m前後で、床面は平坦であるが、副室側の幅がやや狭いという。主室からは枕石は検出されていないようである。出土遺物は鉄製の刀、剣、鏃、鍬先、滑石製勾玉、臼玉などである。副室は幅40～45cm、長さ30cm、高さ35cmであるが、床面は主室より15cm高い構造となっている。副室からは須恵器甕、瓿、土師器椀、勾玉、小玉などが出土している。ことに須恵器甕は、器高29cmで、球形の体部外面に格子目叩きを残し、内面は、当て具痕跡を消すなどの特徴を有する初期須恵器（TK73併行）に属するものとされている（註４）。5世紀前半と推定される七つ塚古墳の副室は、明らかに主室被葬者埋葬時に土器を中心に供献埋納した空間であることが知られる。

鳥取県倉吉市夏谷遺跡３号墳（註５）は、方墳で南北18.2m、東西15.7m、高さ３mの規模を有するものであるが、墳頂には１号から４号までの埋葬施設がある。その中心埋葬施設と考えられる１号埋葬施設では、組み合わせ式箱式石棺の両小口側に副室をもっている。石棺は主軸を南北に置く。その計測値は、副室を含めた内法は255cm。主室の内法は約192cm、（以下約とした数値は報告書127頁第105図から計測したものである）幅は南端小口側で約52cm、北端小口側で約40cmである。それらに続く副室は、南副室の南端小口内幅約55cm、長さ約20cm。北副室の北側小口内幅約37cm、同長さ44cmである。主室には石枕を有する人骨３体を２対１の対置埋葬をしていた。南副室から刀子が１点出土している。この埋葬施設は、箱式石棺を主体としているが、他の石棺と違って石棺の四周を板石敷とし、あたかも竪穴式石室を模したかのごとくの違いを有している。他の古墳を含めて須恵

器は出土していない。時期は４世紀後葉から５世紀後半と推定されている。

副室の機能については、夏谷遺跡３号墳では、南副室からの刀子のみの副葬品であるが、主室と連続する副室は、副葬品を埋納する機能の空間であることが知られた。七つ塚1号古墳と夏谷遺跡３号墳によって、箱式石棺に副室を加える埋葬様式が古墳時代前期末から中期に出現した事実は明らかである。これらの古墳との埋葬形式の系譜関係が直接的にあったとは考えられないが、蒜山地域とは犬挟峠をはさんでの交流が弥生時代から推察される山陰の倉吉地域の古墳からも発見されていることは興味深い。しかし、家の上箱式石棺のように、副室に人骨を埋納した事例は美作地域のみならず岡山県内でも調査された例は知らない。それも、集骨状に複数の頭骨片等を埋納した事例は非常に特異なものと思われる。こうした事例から推察すれば、家の上古墳が箱式石棺の副室を有する形態は、山陰地域との交流ないし影響も推察される。加えて、箱式石棺と石枕の共伴は、真庭市旧久世町地区の中原古墳群（註６）などと共通した埋葬様式をもったものと考えられる。築造時期は先に見た先行研究や３古墳群などを参照にすれば、古墳時代中期の一時点におさまるものと推定される。

ところで、蒜山地域で発掘調査された古墳で、横穴式石室導入前の木棺直葬を埋葬施設とするものに、四ツ塚13号古墳（５世紀末から６世紀前半）（註７）と頓崎９号墳（６世紀中葉）（註８）がある。それぞれの古墳の埋葬主体には須恵器を副葬している上、四ツ塚13号墳の中央埋葬主体の西側に頭位をもつと想定される被葬者には、須恵器転用の枕が置かれているようだ。家の上古墳の箱式石棺は、石枕の存在からみて、これら古墳に副葬されている須恵器導入前の古墳と推察される。ただ、1960年岡山県立酪農試験場蒜山分場の牧草地開墾時に、平林古墳群に属する２基の箱式石棺がブルドーザーによって露呈され調査されている（註９）。５号墳と６号墳である。そのうち６号墳の箱式石棺内から鉄鏃や刀子などと共に須恵器杯身が出土していると言う。旧川上村と旧八束村にまたがる頓崎古墳群やその南にあたる旧川上村平林古墳群等は、四つ塚古墳群と並んで蒜山地域では中心的な古墳群を形成している地域である。こうした中心的古墳群に属する箱式石棺の被葬者には、須恵器が取り入れられたのか、あるいは時期が違うのか、詳細は分からない。

この様にみると、家の上古墳の箱式石棺は、当地域での数少ない調査事例といえる。共伴遺物はないが、幸いにも池田次郎氏によって人骨の鑑定がなされた。鑑定によると、最終埋葬である主室の１号人骨は熟年女性、副室には２号人骨の壮年女性と３号人骨は性別不明の成人とされた。副室に集骨状に埋葬された２人骨については、当初主室に埋葬された後に改葬され副室に集骨されたものなのか、あるいは、他所でモガリのような行為を行った後に、初めて石棺を築いた１号人骨とともに副室に収めたものなのか即断できない。ただ、先に２号・３号人骨を主室に埋葬して、後に先葬人骨を整理して１号人骨を埋葬したとすれば、副室の集骨状況の詳細は知りえないが、改葬時に主室に少しは先葬人骨が遺存するか、その痕跡を留めていてもよいのではないかと思われる。主室に残る石枕は、西小口に１対のみであることなどを考慮すれば、家の上古墳の造営は１号人骨（熟年女性）埋葬時に初めて築造したものと考えられる。そして、その時点で主室・副室をもつ構造とし、１号被葬者と２号・３号人骨を同時に埋葬したと推察される。しかし、副室とはいえ同一個体の箱式石棺に２号・３号人骨を埋葬されていたことは、これら人骨相互の関係は、一つの親族関係を有するものとしてとらえたい。その関係の詳細をかたる資料はないが、少なくとも先に死亡したと想定される副室の性別不明の成人と壮年女性は、主室の熟年女性の埋葬時に初めて埋葬されたと想定されるので、これら被葬者は、村落集団内では長権をもった被葬者の親族関係としてとらえられる。津山市（旧久米郡久米町）所在の久米三成４号墳（註10）は、吉井川の支流久米川中流域北岸の丘陵に立地する前方後方墳である。

時期は、出土土器から５世紀初めととらえられている。埋葬施設は、後方部と前方部に大人用の組み合わせ式箱式石棺が各１基と後方部墳丘斜面に１基、墳丘裾に３基の小形箱式石棺が埋納されていた。このうち後方部の第１主体とされる石棺から、頭位を西と東に置いた、対置埋葬の人骨を２体検出した。人骨鑑定（註11）では、西頭位の第１人骨は成年後半～熟年前半の男性。東頭位の２号人骨は成年女性であった。また、歯冠計測値では、この男女人骨は兄妹・姉弟という血縁関係であるとされている（註12）。このように、古人骨の研究では、歯冠計測値によって、古墳時代前期から５世紀後半頃までの男女合葬埋葬の被葬者は夫・妻という配偶者関係ではなく、兄弟・姉妹であることが明らかにされている。そして、その造営契機と埋葬順位も男女それぞれという実態が指摘されている。家の上古墳の人骨は、歯冠計測値を行っていないし、２号人骨と３号人骨ともそうした計測ができる状態のものではないが、少なくとも１号人骨（女性）と集骨であれ２号人骨（女性）の埋葬関係は、古墳時代前半期の蒜山地域社会では、在地村落における長権は母系が優勢な様相が窺える。このように、家の上古墳は、一般的に５世紀後半以降に確立されていくとされる長権が父系化する以前の古墳時代社会の実態を示唆するものである。加えて、こうした様相をこの蒜山地域において把握できる数少ない調査事例として評価される。

小稿を作成するに当たっては、最初に故池田次郎先生にお詫びしたい。先生からの原稿は1992年の12月頃に当時勤務していた岡山県古代吉備文化財センター宛てに、津寺遺跡などと一緒に頂いたようでしたが、わたくしの怠慢のため今日まで公表できなかったことであります。しかし、その鑑定については、百数十基の古墳を有する蒜山地域では初めてのことであり、ご業績は古墳時代の地域社会を考察する上で欠くことのできない研究成果として、末永く生かされるものと思われます。ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたしますとともにお礼を申し上げます。

また、下記の方々や機関からはご教示やご支援をいただきました。記して感謝の意を表します。
氏平昭則、大谷博志、岡田　博、小郷利幸、亀山行雄、切明友子、澤田秀実、島崎　東、豊島雪絵、馬場昌一、平井典子、藤原好二、松本和男、光永真一、村上幸雄、村上　岳、行田東洋治、行田裕美、岡山県古代吉備文化センター、津山弥生の里文化財センター、総社市学びの館、真庭市教育委員会

註

1）１号人骨の赤色顔料については、2014（平成26）年11月10日岡山県古代吉備文化財センターにて実見したおりに確認する。その際には、光永真一、島崎　東、亀山行雄、氏平昭典の諸氏に人骨の実見ならびに写真撮影等の便宜を頂いたほか教示を受けた。

2）豊島直博2000「枕を用いる葬送儀礼の展開―岡山県北部を中心に―」『古代吉備』第22集　古代吉備研究会

3）鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子1965『長福寺裏山古墳群』長福寺裏山古墳群・関戸廃寺調査推進委員会

箱式石棺ではないが、長持形石棺に副室を設けている古墳が岡山県下に下記の２基の古墳が知られている。

① 奥の前１号墳（津山市油木）は、墳丘長66ｍの前方後円墳であるが、後円部のほぼ中央に古墳の主軸方向（南北）に並行して長持形石棺が埋納されていた。副室は石棺の南端部に２枚側石と小口石で内法長91㎝、幅約35㎝の仕切りをなすものである。そして、この副室には竪矧板革綴短甲・内行花文鏡などを含む副葬品が埋納されていたとされている。時期は前期後半。

・今井　尭1967「美作国久米郡里公文高塚」『美作考古学研究会』４　美作考古学研究会

・倉林眞砂斗・澤田秀実編2000『美作の首長墳―墳丘測量報告―』（美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅰ）　吉備人出版

・倉林眞砂斗2005『石棺と陶棺』吉備考古学ライブラリィ・12　吉備人出版

② 花光寺山古墳（瀬戸内市長船町）は、墳丘長約86ｍの前方後円墳である。昭和10年代初めに乱掘された埋葬施設は、後円部頂のやや東よりに古墳の主軸に沿って南北方向に長持形石棺を直葬したものである。副室は石棺本体の南北にそれぞれ平石の側石と小口石ならびに天井石を組み合わせて小空間を設けている。北側の副室は、内法長97㎝、幅56㎝で、遺物は確認されていない。時期は前期後半。

・梅原末治1937「備前行幸村花光寺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』二　日本古文化研究所

・亀田修一1998「10花光寺山古墳」『長船町史』史料編（上）考古・古代・中世　長船町

これら２基の古墳は、いずれも首長墓墳であり、非首長墳である本古墳とは比較できないが、石棺に副室が出現したのは古墳時代の早い時期からであること、そして、その機能は副葬品の埋納と同時に２室あるものは他の１室の意味合いが問われることとなる。

4）田辺昭三1981『須恵器大成』　角川書店

5）加藤誠司他1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第84集　倉吉市教育委員会

6）福田正継・山磨康他1995「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会・日本道路公団広島建設局津山工事事務所

7）近藤義郎1954『蒜山原―その考古学的調査―』　岡山県

近藤義郎1992『蒜山原四つ塚古墳群』（改訂版）　岡山県八束村

8）鎌木義昌・亀田修一1986「頓崎９号墳の発掘調査」『蒜山研究所研究報告』第12号　岡山理科大学

9）近藤義郎2006『発掘五十年』　河出書房新社　164～166頁

河本清1960「岡山県真庭郡蒜山原バンノ木・平林古墳の調査」『考古学研究』第７巻第２号　ニュース29頁

10）柳瀬昭彦・河本清1979「久米三成４号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』30　岡山県教育委員会

・行田裕美・乗岡実編2000『吉備の古墳』上　吉備人出版　本墳について方墳２基という見解を述べている。

11）川中健二1982「久米三成４号墳」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会

12）田中良之1995「古墳時代親族構造の研究―人骨が語る古代社会－」　柏書房

参考文献

1　今井尭・渡辺健治・神原英朗他1969「美作津山市沼六号墳調査報告」『古代吉備』第６集　古代吉備研究会

2　岡本寛久・池田次郎他1977「外道山南古墳」「外道山南古墳出土人骨について」『外道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　17　岡山県教育委員会

3　今井尭1982「古墳時代前期における女性の地位」『歴史評論』Ｎｏ383　校倉書房

4　今井尭・池田次郎他1984「竹田５号墳」「竹田墳墓群の人骨及び石棺材」『竹田墳墓群』　鏡野町教育委員会

5　安川豊史1992「古墳時代における美作の特質」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下　山陽新聞社

6　清家章2001「畿内周辺における箱式石棺の型式と集団」『古代学研究』152　古代学研究会

7　清家章2001「吉備における同棺複数埋葬とその親族関係」『古代吉備』第23集　古代吉備研究会

8　清家章2002「近畿古墳時代の埋葬原理」『考古学研究』第49巻第１号　考古学研究会
9　都出比呂志2011『古代国家はいつ成立したか』岩波新書1325　岩波書店

附載

岡山県蒜山中学校門前の箱式石棺出土の古墳時代人骨

池田　次郎

昭和44年、岡山県真庭郡八束村下福田字中井川の蒜山中学校門前で宅地造成中に発見された１基の箱式石棺が、岡山県教育委員会の河本清氏により調査された。箱式石棺は、主室と副室に分かれており、主室は内法で長さ約180㎝、幅約35㎝で、小口石が残っていない副室の長さは80㎝程度とみうけられる。人骨は主室と副室に遺存しており、副葬品は検出されていないが、石棺の時代は古墳時代中期後半と推定されている（註１）。

人骨の残存状態と個体

頭蓋骨 ： 主室の西小口近くに残存する顔面がほぼ完全な１号頭蓋と、副室から出土したとみられる脳頭蓋後半部を主体とする２号頭蓋、さらにこれらとは明らかに別個体に属する右頭頂骨破片の３号頭蓋を区別することができる。

１号頭蓋は、下顎骨を含め顔面頭蓋から脳頭蓋の前半分までよく残している。頭蓋骨は、前頭骨、蝶形骨、左右頭頂骨の前半分、乳様突起を欠く右側頭骨を含み、顔面頭蓋には欠損部がほとんど見られない。下顎骨は、右では下顎枝後縁と下顎角を欠くだけであるが、左では第２小臼歯から後の骨体と下顎枝を失っている。上顎骨には左の第１小臼歯と右の犬歯が、下顎骨には左右の中切歯、側切歯、犬歯と右の第１小臼歯が釘植し、上下左右の第１ ・ 第２大臼歯と上顎右の第２小臼歯の歯槽は閉鎖している。また、上顎左の第１小臼歯は齲蝕のため歯根を残すだけで、下顎右の第２小臼歯の歯槽も浅く、この歯も生前に脱落していたものと思われる。

眉間、眉丘の高まりは認められず、側頭線は弱く、乳突上稜を欠き、下顎骨はきゃしゃであるなど女性骨の特徴が明瞭にみられる。側頭部を除く冠状縫合と矢状縫合は癒合していないが、大臼歯全部と小臼歯の一部の歯槽が閉鎖し、下顎前歯の摩耗が著しく強い。熟年女性骨と推定される。

２号頭蓋は、後頭鱗の右半分と左右頭頂骨の後部約三分の二とからなる脳頭蓋後部のほか、後頭骨底部、左側頭骨、右側頭骨と蝶形骨の一部、左頬骨、左右の上顎骨骨体の破片が残存するが、これらはいずれも接合できない。上顎骨には左の第２小臼歯と第１大臼歯が釘植し、左の第１ ・第２大臼歯、右の第２小臼歯と第１ ・ 第２大臼歯の歯槽は閉鎖している。残存する左第２小臼歯はムシ歯である。右上顎骨の骨体前面に赤色顔料が付着している。

乳様突起はきわめて小さく、乳突上稜を欠き、外後頭隆起が弱いなどの特徴は女性的である。１号頭蓋と同様に矢状縫合と人字縫合に癒合は見られないが、上顎大臼歯の大部分の歯槽が閉鎖しており、残存する第１大臼歯の摩耗はグロカの３度に相当する。壮年後半の女性骨と推定される。

３号頭蓋は、右頭頂骨のプレグマ付近の小破片で、この部が残存する１号頭蓋はもちろんのこと、骨質、色調、厚径などからみて２号頭蓋のものではない。骨壁は著しく厚く、性別不明の成人骨である。

左上腕骨 ： 骨体の近位約三分の一の破片で、骨質や色調は３号頭蓋に類似する。

仙骨 ・ 寛骨 ： 仙骨は第３仙椎以下と右耳状面の大部分を破損する。左寛骨では寛骨臼を中心とする部分、右寛骨では坐骨から腸骨下部までと腸骨翼の一部が残存する。左寛骨と仙骨の左耳状面は関節し、右寛骨もこれと同一個体に属す。大坐骨切痕は鈍角を呈し、仙骨と寛骨を関節させると大骨盤

は浅く広く、女性骨であることは確かである。これらの骨の出土場所が主室・副室のいずれか不明のため、これが１号頭蓋。２号頭蓋のどちらのものか決められない。

大腿骨：右１本と左２本が残存する。右大腿骨（１号）は、近位約半分を残すが、頭や頸の一部、大転子、小転子を破損しており、骨体中央付近では前面だけが残っている。骨体上部は著しく扁平で、最大径、最少径とも大きい。左大腿骨のうち１本（２号）は、骨体の大部分を残しており、骨体上部の扁平性は１号大腿骨ほど顕著でなく、その最大径もやや小さいので、１号大腿骨とは別個体のものである可能性もある。もう１本の左大腿骨（３号）は、小転子から中央付近までの骨体破片で、中央部および上部の骨体計測値は他の２本より小さいが、柱状性はきわめて強い。骨質、色調とも左上腕骨に似ている。

脛骨：左脛骨の骨体近位約半分の破片と、右脛骨の骨体中央付近の内側面の一部が残存する。左右の脛骨は、形態的にみて対をなすものではなく、左脛骨の骨質は３号左大腿骨に類似する。

以上、残存する人骨は女性の頭蓋２体分、骨盤１体分、性別不明成人の頭蓋、上腕骨それぞれ１体分、大腿骨２体分もしくは３体分、脛骨２体分である。性別不明の骨のうち、頭蓋骨と上腕骨、左大腿骨（３号）、左脛骨は骨質、色調などからみて同一個体の可能性が高い。したがって、左右大腿骨（１号と２号）、右脛骨が女性骨だとすれば、被葬者は３体で、その内訳は熟年女性、壮年女性、性別不明の成人それぞれ１体とみることができる。３体のうち１号頭蓋が主室に遺存していた熟年女性が最終の被葬者で、その埋葬に際して先葬２体の遺骨が副室にかたづけられたのであろう。

人骨の形態特徴

１号熟年女性頭蓋と３本の大腿骨の形態特徴を明らかにすることができた。

１号頭蓋は、女性としては著しく大きい（付表１）。主要な顔面計測値について山陽（註２）、南九州（註３）の古墳人、西北九州弥生人（註４）、津雲縄文人（註５）、畿内現代人（註６）の女性平均値と比較する（表１）。

蒜山１号の顔面幅径は、すべて比較集団のいずれよりもはるかに大きく、高径も大きいが、その程度は幅径ほど著しくない。顔高は、畿内現代人よりやや低いが、それ以外の集団より高く、コルマンの顔示数は山陽、南九州古墳人とともに畿内現代人と西北九州弥生人・津雲縄文人の中間に入る。上顔高は畿内現代人、山陽古墳人の平均値に近く、コルマンの上顔示数は畿内現代人、山陽古墳人より小さく、南九州古墳人、西北九州弥生人、津雲縄文人よりやや大きい。中顔幅が著しく広いため、ウィルヒョーの顔示数と上顔示数は比較集団中、最低もしくはそれに近い。

眼窩示数は畿内現代人、津雲縄文人に次いで大きく、鼻示数は畿内現代人に次いで小さく、山陽古墳人に最も近い。歯槽側面角は、山陽古墳人以外の集団と大差なく、鼻根湾曲示数は山陽古墳人とともに最も大きい。

以上、蒜山１号頭蓋の顔面形態は、一部の特徴で南九州古墳人に類似するものの、全体としてみれば山陽古墳人に最も近い。また個体的特徴として、すべての計測値が大きく、特に中顔幅が著しく広い点をあげることができる。なお、翼状骨が両側に、眼窩上孔が左側だけに認められた。

次に大腿骨計測値であるが、男性骨か女性骨か判定することができないので、骨体中央横断示数を古墳時代８地域集団（註７）と、骨体上部の最大径と最少径の比である骨体上部横断示数を東日本古墳人（註８）と西日本古墳人（註９）と比較する。

中央横断示数は、２号（107.4）、３号（120.8）とも大きく、３号は古墳人８地域集団中、最も大きい南九州古墳人男性（108.8）、女性（105.3）をはるかに上まわり、２号はその男性値に近い。また、

骨体上部横断示数では、1号（70.6）は東日本古墳人女性（71.6）に近く、西日本古墳人女性（74.8）より小さいが、2号（80.0）と3号（82.1）は男性の東日本古墳人（78.9）、西日本古墳人（77.5）より大きい。

表1　頭蓋計測値の比較（女性）

		古墳			弥生	縄文	現代
		蒜山1号	山陽	南九州	西北九州	津雲	畿内
45	頬骨弓幅	(136)	128.3	131.5	130.2	132.6	125.8
46	中顔幅	107	97.7	99.5	95.9	99.6	95.6
47	顔高	114	110.4	109.1	104.9	106.2	115.4
48	上顔高	66	66.3	61.0	60.9	62.6	68.3
47/45	顔示数（K）	(83.8)	84.9	83.3	81.7	80.1	91.6
47/46	顔示数（V）	106.5	113.1	108.6	109.5	108.9	120.4
48/45	上顔示数（K）	(48.5)	50.8	47.5	47.6	47.6	54.6
48/46	上顔示数（V）	61.7	66.8	60.8	63.5	63.8	71.5
50/F	鼻根湾曲示数	89.5	89.8	86.1	76.7	80.9	87.3*
51	眼窩幅（左）	43	41.8	40.7	41.1	41.9	41.0
52	眼窩高（左）	35	33.1	32.0	31.2	33.8	34.4
52/51	眼窩示数（左）	81.4	79.3	78.7	75.9	81.5	83.0
54	鼻幅	27	25.4	26.4	26.6	25.4	25.1
55	鼻高	52	49.1	46.7	46.3	46.2	48.6
54/55	鼻示数	51.9	52.1	56.5	57.4	54.7	51.2
74	歯槽側面角	68	65.2	69.6		69.6	68.7

＊西南日本現代人（中橋・永井 1989）

註

1）近藤義郎他 1992『蒜山原四つ塚古墳群』（改訂版）P.19　真庭郡八束村 および河本清氏の私信による。

2）池田次郎 1993「古墳人」『古墳時代の研究 I 総論・研究史』PP.27－95　雄山閣

3）内藤芳篤 1985「〈シンポジュウム〉国家成立前後の日本人―古墳時代人骨を中心にして―II　南九州およびその離島」『季刊人類学』16（3）：PP.34－47

4）内藤芳篤 1971「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』79：PP.236－246

5）池田次郎 1988「吉備地方海岸部の縄文時代人骨―時代差と地域性の成立」『考古学と関連科学』PP.333－371　鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会　岡山

6）宮本博人 1923「現代日本人人骨の人類学的研究　第一部　頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』39：PP.307－451

7）註2）に同じ

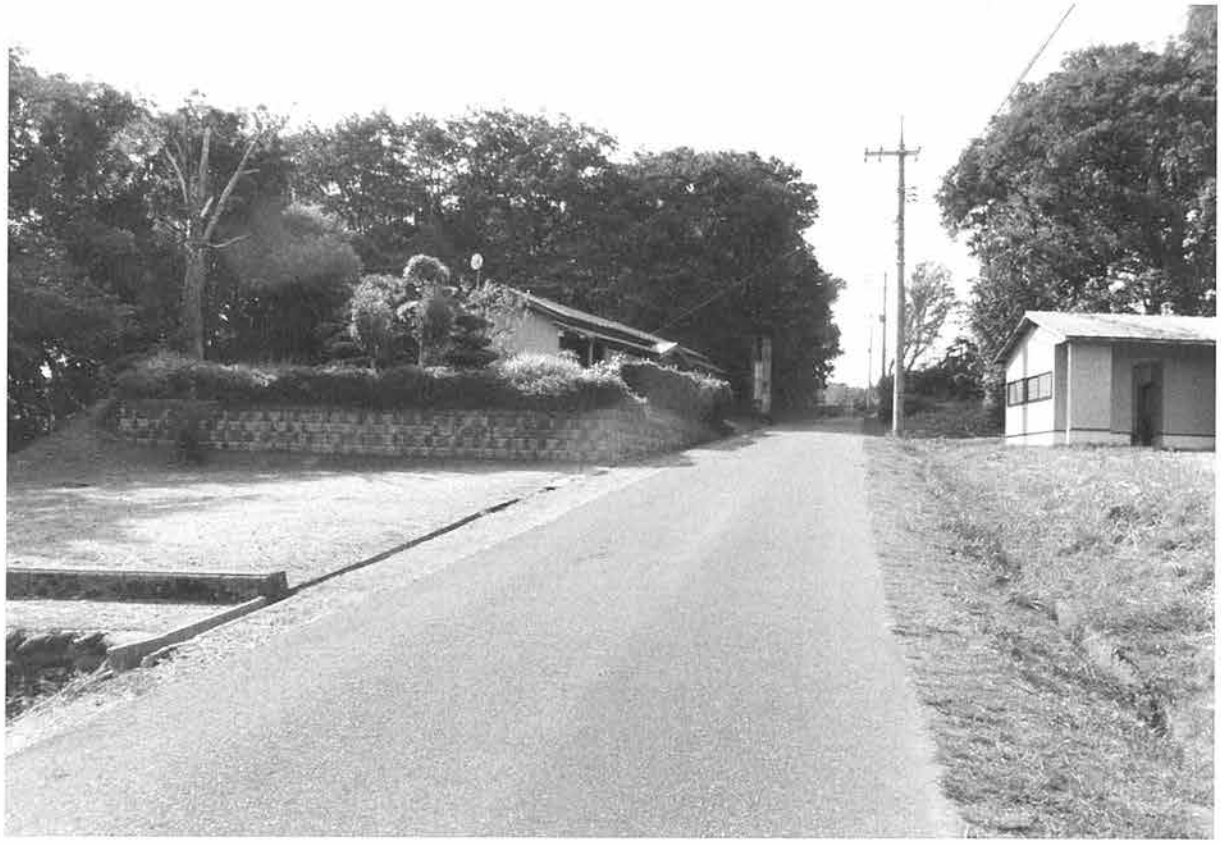
8）Yamaguchi,B.1986 Metric characters of the femora and tibiae from protohistoric sites in eastern japan. Bull. Natn Sci.Mus.,Tokyo,Ser.D(Anthrop.),12:PP.11－23

9）城　一郎 1938 古墳時代人人骨の人類学的研究　第三部　下肢骨．人類学輯報（京都帝国大学医学部病理学教室人類学業績）1：PP.245－324

付表　1号頭蓋計測値（表1の項目を除く）

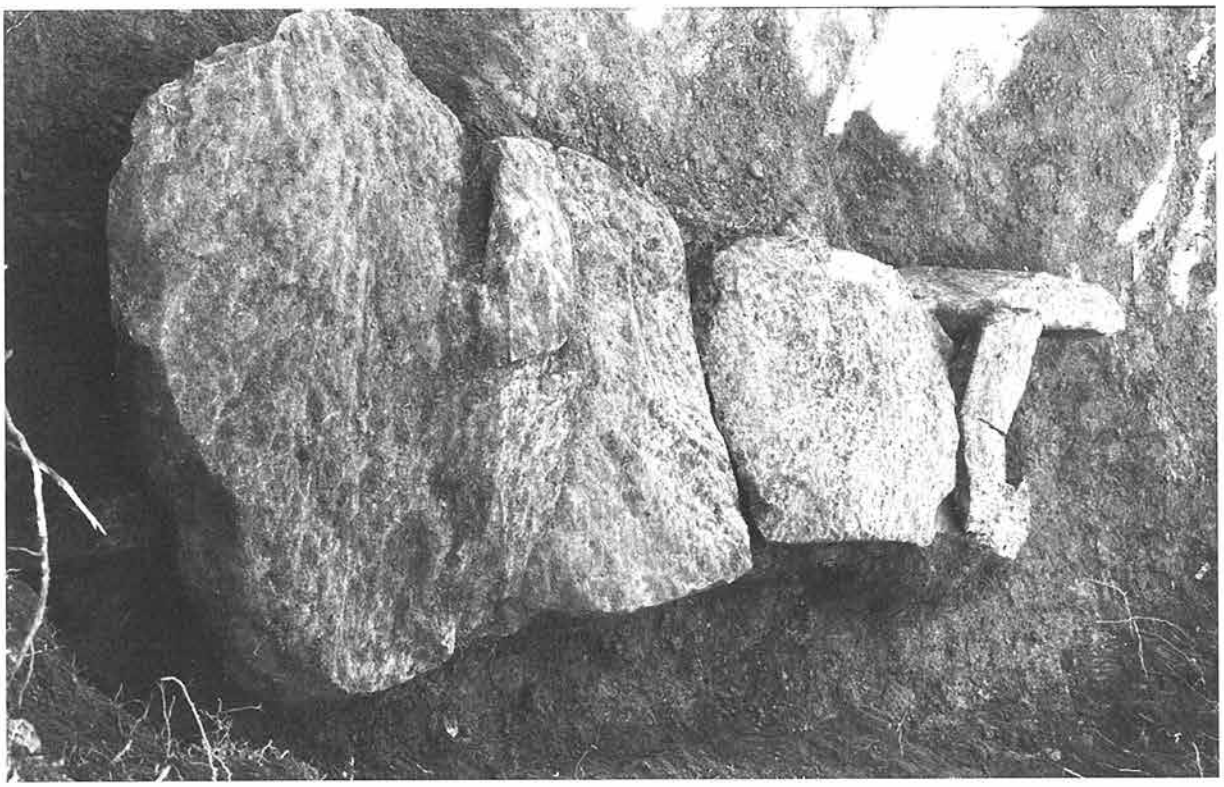
9	最小前頭幅	98	55(1)	梨状口高	38
10	最大前頭幅	123	56	鼻骨長	18
9/10	横前頭示数	79.8	57	鼻骨最小幅	9
20	耳プレグマ高	108	57(1)	鼻骨最大幅	(17)
26	正中矢状前頭弧長	122	57/57(1)	横鼻骨示数	(52.9)
29	正中矢状前頭弦長	110	57(2)	鼻骨上幅	9
29/26	矢状前頭示数	90.2	66	上顎歯槽長	50
32(5)	前頭湾曲角	134	63(2)	前口蓋幅	30
41	側顔長	76	72	全側面角	86
43	上顔幅	107	73	鼻側面角	92
43(1)	内眼窩間幅	98	75	鼻背側面角	64
44	両眼窩幅	101	75(1)	鼻背角	22
44(1)	鼻頬幅	107	67	前下顎幅	46
49	後眼窩間幅	24	69	オトガイ高	30
50	前眼窩間幅	17	69(1)	下顎体高（右）	28
F	鼻根横弧長	19	69(3)	下顎体厚（右）	14
50/44	前眼窩間示数	16.8	69(3)/69(1)	下顎体高厚示数（右）	50.0
51	眼窩幅（右）	45	70(3)	下顎切痕高（右）	14
52	眼窩高（右）	34	71(1)	下顎切痕幅（右）	41
52/51	眼窩示数（右）	75.6	70(3)/71(1)	下顎切痕示数（右）	34.1

1. 家の上古墳位置遠景（南東から：2015年10月撮影）



2. 家の上古墳所在地（校門の柱の左・東から：2015年10月撮影）

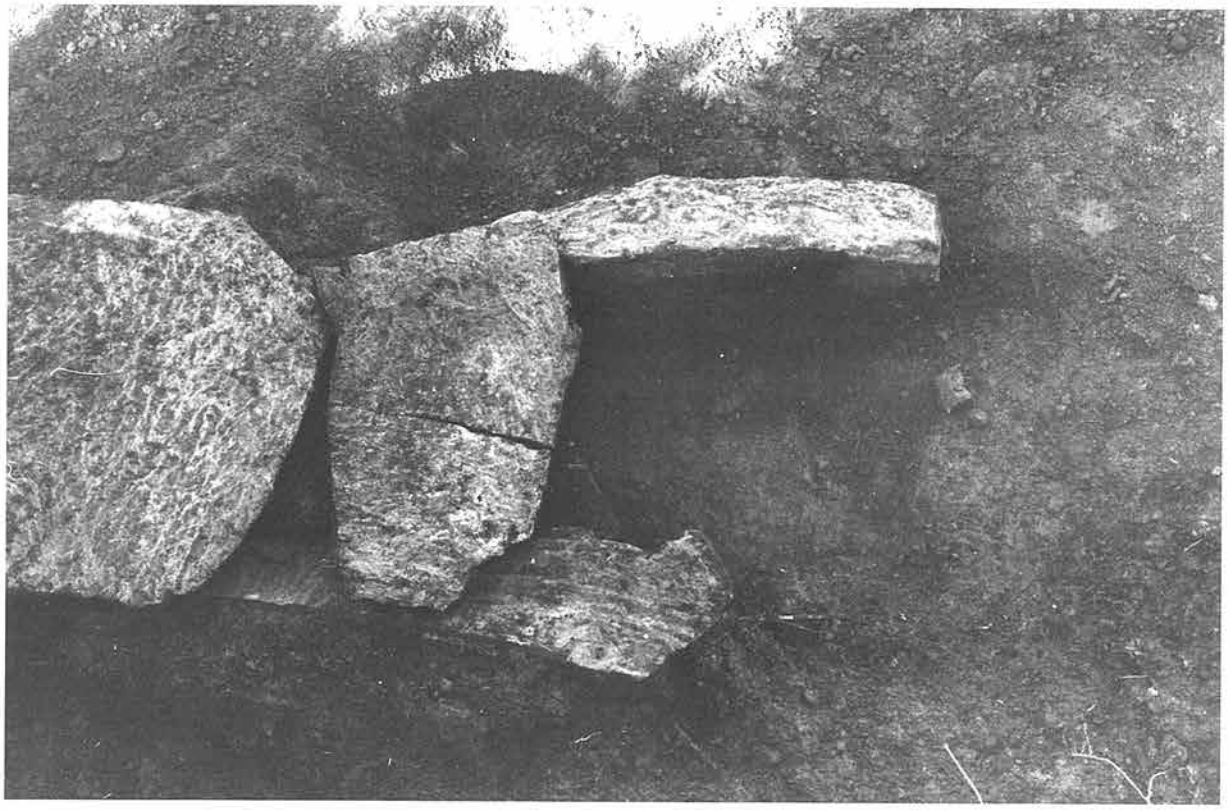
図版２



1. 箱式石棺蓋石検出（南西から）

2. 箱式石棺蓋石検出（南東から）

1. 石棺蓋石の接合状況（南から）



2. 石棺副室部（東端小口石と天井石消失・南東から）

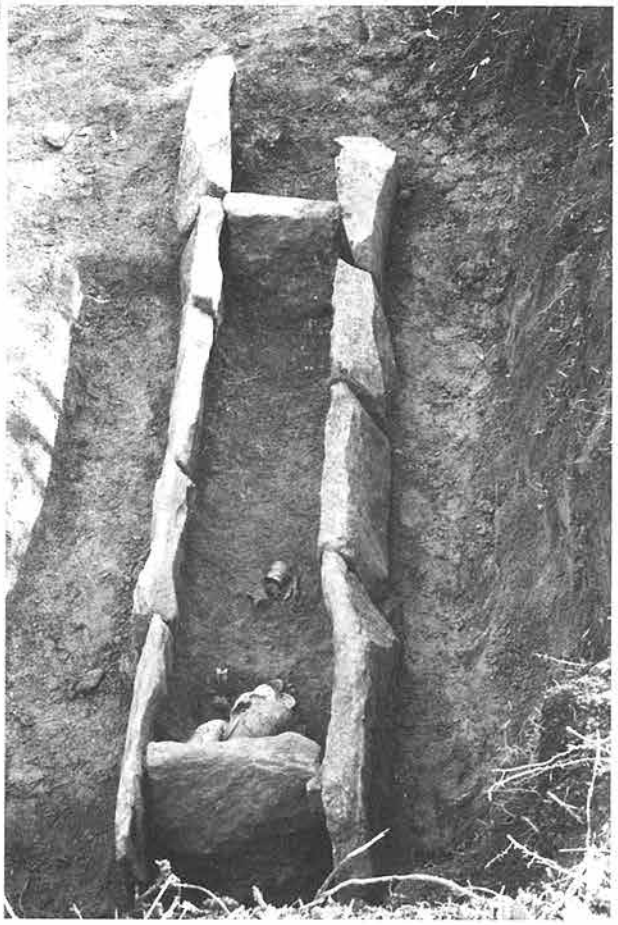
図版４

1. 石棺蓋石除去後（東から）

2. 石棺頭蓋骨（1号人骨）と石枕検出状況（東から）

図版５

1. 石棺、人骨検出状況
（主室と副室［手前］・東から）



2. 石棺、人骨検出状況　（西から）

図版６

1．石棺、石枕の検出状況（東から）

2．1号人骨頭蓋骨（「岡山県教育委員会所蔵」2014年11月撮影）

報告書抄録

ふりがな	いえのうえこふんはっくつちょうさほうこく
書名	家の上古墳発掘調査報告
シリーズ名	真庭市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	7
編著者名	河本　清・池田次郎
編集・発行機関	真庭市教育委員会
所在地	〒719-3292 岡山県真庭市久世2927番地2 TEL 0867-42-1094　FAX 0867-42-1416
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	発掘原因
いえ うえこふん 家の上古墳	まにわしひるぜんしもふくだ 真庭市蒜山下福田 あざいえ うえ 字家の上466番地	33214	335880025	35° 16′ 55″	133° 40′ 48″	19691111 ～ 19691112	2.98㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家の上古墳	古墳	古墳	箱式石棺1	人骨(3体)	

要約	家の上古墳は、主室と副室を有する組み合わせ式の箱式石棺を主体部とする古墳を検出した。墳丘については、その存在を含めて明らかにできなかったが、古墳時代の蒜山地域の墓制を知るための貴重な資料となった。

印刷データ

紙　　質　表　　紙＝レザック 215kg
本　　文＝琥珀 90kg
写真図版＝ニューVマット 110kg

文　　字　フォントワークス Open Type フォント
本　　文＝マティス Pro M

本文図面　Windows Adobe Illustrator CC

写　　真　本文図版＝Epson Scan GT-X750 130 線

真庭市埋蔵文化財調査報告７

家の上古墳発掘調査報告

平成28年3月31日　印刷
平成28年3月31日　発行

編集・発行　真庭市教育委員会
岡山県真庭市久世2927-2
印　　刷　作陽印刷工業株式会社
岡山県真庭市落合垂水237